

## 町出身の若林選手、根本選手がプロ入り 若林選手が町長を表敬訪問



10月、町出身の若林楽人選手、根本悠楓選手の2人がそれぞれ西武ライオンズ、日本ハムファイターズからドラフト指名を受け、プロ野球選手2人の同時誕生に町民が湧きました。



今後の活躍を  
応援します



若林選手(外野手)は緑丘ファイターズ(旧緑丘小)―白老中―駒澤大付属苫小牧高一駒澤大学、根本選手(投手)は虎杖浜タイガース(虎杖小)―白翔中―苫小牧中央高。11月6日には若林選手が戸田安彦町長を表敬訪問しました。役場正面玄関で職員による歓迎セレモニーを受けた若林選手に戸田町長が「好きな野球でまた一回り大きくなった姿を見たいですね」と激励。若林選手は「小さなころから育ててもらったまちで歓迎されると、少し実感が湧きましたが、ここからが勝負と思っています。走攻守そろった魅力的な選手になりたいです。小さな積み重ねを大事にして頑張りたい」と力強く抱負を述べました。

## 1981年創刊「白老郷土文芸」第40号を発刊



郷土史から小説、随筆、詩、俳句・川柳・短歌、論説 etc.

町民の発表の受け皿となってきた町内唯一の文芸誌が、発刊40号を迎えました。現在編集に携わるスタッフらも「あらためて重みがあるものだと実感しています」と口をそろえています。

発行元は町文化団体連絡協議会(文連協)。編集委員長の岩間隆一さん、編集委員の渡辺裕美さん、山口美枝子さん、文連協事務局の日野戸謙一さんの4人が、ボランティアで作業を続けています。毎回、投稿作品の編集を通し「白老の文化を愛して文化活動をしている人たちがたくさんいます。まちの誇り」「皆さんの人生の表現、生きている証し。これを残せるのは幸せ」「まちに対する思いをすごく感じます」と、地道な活動の中から、町民の心情や町に対する思いなどを感じ取っているようです。第40号は初めて町内小中学生の読書感想文の一部学年を掲載する“進化”も遂げています。「レベルの高さに驚きました」と感想をもらっていました。

第40号(A5判、154頁、27作品掲載。税込600円)は150冊印刷。図書館や学校などに寄贈しているが、蔵、こんや、カメラのむらかみ、喫茶休養林で販売しています。4人は「ぜひ気軽に投稿してください」と呼び掛けています。



## ビニールハウスの有効活用で地域貢献



白老町花とみどりの会(吉村智会長)は、4、5月に緑丘のフラワーセンター(大坂節生センター長)で育苗作業をします。6月には、68,000本の苗(マリーゴールド、サルビアほか)が花を咲かせると、各園、学校、事業所、町内会などに配布されます。この事業は、町補助金のほか、配布先などからの緑の募金により集められた資金で成り立っています。

花苗出荷後のビニールハウス(4棟)は、翌年の4月まで使用しないため、大坂センター長は、何か有効活用ができないかと、昨年度から試験的に野菜を栽培したところ、キュウリ、トマトなどが収穫できました。採れた野菜をセンターのスタッフたちや、町民の皆さんに試食をしてもらったところ好評だったことから、今年はさらにスイカ、枝豆、白菜、キャベツなどを栽培し、近隣の保育園や子ども食堂、学校給食の食材として提供しました。当会は、地域貢献の一環として、町民の皆さんに喜んでほしいと、次年度以降もこの事業を継続する予定です。

